

たぬき  
の  
おたから  
中川善史



たぬきのおたから

うちでは、タヌキを飼っています。お爺さんが、買ったのです。

今年の春休みの頃、近所に住む鶴太郎爺さんという、うちのお爺さんの昔からの友達を籠に入れて持ってきたのです。

「ほら、亀吉さんや。これが、宝の山を知っているタヌキだよ。見てごらん、背中の毛が金色をしているだろう。こういうタヌキが、福を招くのさ。これを飼っていけば大もうけ間違いなし」

うちのお爺さんは亀吉というのです。うちの亀吉爺さんは、鶴太郎爺さんの話しに疑わしそうに聞き返しました。

「本当に、宝の山を知っているタヌキなんて、いるのかい」

「ああ、いるとも。このタヌキの元の持ち主は、このタヌキのお陰で、あちこちからお金やお宝が転がり込んできて、家の金庫はお金の重さで家ごと沈みそうだし、銀行の口座は、これ以上預金すると銀行のコンピュータが爆発してしまうというので、仕方なく手放すことにしたんだ」

うちのお爺さんは、ごくりと唾を飲み込みました。お爺さんは、こういう儲け話に弱いのです。うちの物置には、お金が儲かる壺だとか、大黒さんの人形だとか、そんなものであふれ返っています。お爺さん



の本棚は「こうすれば儲かる」「ああすれば儲かる」と「儲かる」というタイトルの本がぎっしり並んでいます。宝くじも、毎回買っています。30年欠かさずに買いつづけて、3000円以上当たったことはありません。それでも、諦める気はないようです。

以前は、僕にも、いっぱいお小遣いをくれました。

「たかしや」

あ、僕の名前はたかしといいます。和泉谷たかしです。小学校六年生です。

「たかしや、お前、いっぱい勉強して、いい大学に入って、いい勤め先に行って、出世して、大もうけして、そうしてお爺さんにいい思いをさせておくれ。ほら、お小遣いを上げるからね。お爺さんから、お小遣いをもらったことを忘れちゃ駄目だよ。たかしの恩人はお爺さんだからね。いいね。大人になったら、きつとお爺さんに恩返しをするんだよ」

ずうっと、お爺さんが耳元で、そう言い続けるので、僕は気になって気になって勉強どころではありません。だから、成績もちっとも上がりませんでした。

お爺さんは、僕にお小遣いを上げたのは失敗だったと思ったようです。今は、僕の出世は諦めたらしく、

「大きくなったら、上げただけは返しておくれよ」

と時々言うだけです。そのかわり、今度は、一生懸命、妹にお小遣いを上げています。

「あゆ子や、お前は頭がよくって、可愛いねえ。頭の良さで出世してくれればよし、可愛さの方で芸能界で売り出してもよし、両方駄目でも、エリートの子より、女の子だくれればいい。ああ、こうしてみると、お小遣いを上げるなら男の子より、女の子だな。いいかい、あゆ子、お爺さんからお小遣いをもらったことを忘れちゃいけないよ」と、ずっと、妹に言い続けています。あの分では、あゆ子の成績も上がらないでしょう。それどころか、中学に入ったらブスになるかもしれない。

孫にお小遣いを上げて、大人になったら、その何十倍も何百倍も返してもらおう、と考えるお爺さんですから、「宝の山を知っているタヌキ」に目が眩むのは当たり前前かもしれない。

鶴太郎爺さんの話を聞きながら、うちの亀吉爺さんの目が、きらきら輝いたり、ぐるぐる回ったりし始めたので、僕は、だいぶ目が眩んできたな、と思いました。

「だが」

と、お爺さんはそこで踏みとどまりました。

「そんなにすごいタヌキなら、なんで、鶴太郎さん、あんたが飼わないんだい」

おお、と、僕は感心しました。鶴太郎爺さんの答え次第では、タヌキを買うのを止めるかもしれない、と思ったのです。亀吉爺さんも、欲に目が眩むばかりではないのかもしれない、と。

「うちは、嫁が許してくれないもの」

と、鶴吉爺さんは言いました。

「うちの嫁と来たら、動物なんて飼うのはもつての外。餌代はかかるし、世話は大変だし、臭いはするし、絶対反対、の一点張りだ。しかたなく、みすみす、泣く泣く、宝の山をあんたに譲るよ。三万円」

「三万円は高いんじゃないか」

「高いものか。今、ペットショップへ行つて、犬でも猫でも買ったらいくらすると思つてゐるんだい。しかも、こっちはただのペットじゃない。宝の山だ。本当は百万円でも、いいくらいなんだが、あんたとわしの仲だ。古い付き合いだ。三万円を手放そうというのだよ。いやなら、いいんだよ。もっと高く買ってくれるというひとが、いくらでもいるんだから。そっちへ、回してもわしは構わないんだから」

お爺さんは、眉毛をびくびくさせながら聞いていましたが、やがて思い切つたように、

「買った」

と言いました。鶴太郎爺さんも、

「売った。三万円、即金でいただきましょう」

亀吉爺さんは、傍らで眺めていた僕の方を振り向くと、

「おい、たかしゃ。お前に、二年前のお正月と、三年前の夏休みと春休みに一万円ずつ、お小遣いを上げたなあ。あれ、悪いけど今返してくれな  
いか」

僕は、ふるふると首を横に振りました。

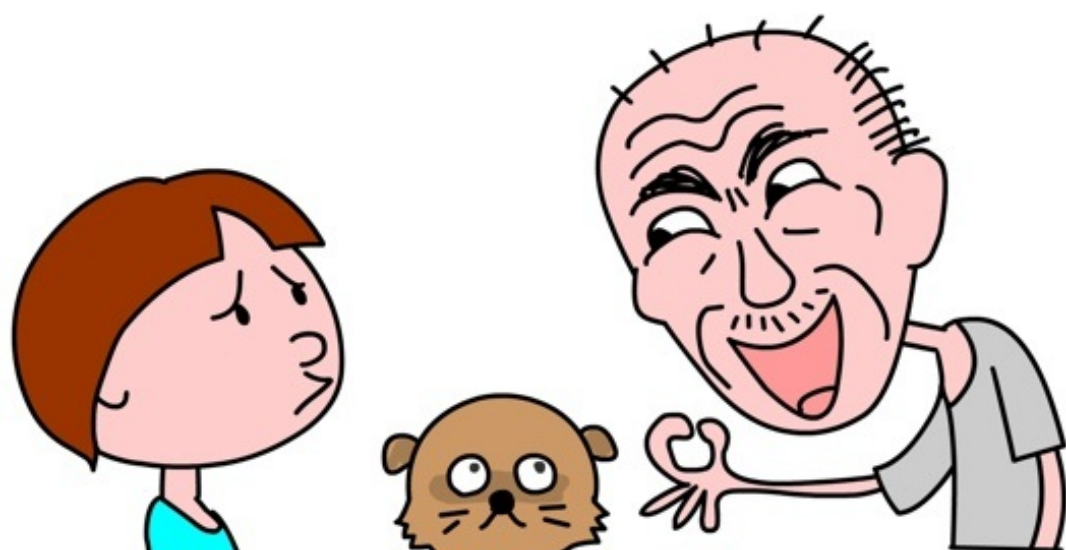
「なんだ。あの時、出世したら何倍にもして返すという話しだったじゃないか」

「僕、出世なんかしていないよ」

「何を言っている。あの時、四年生だったろう。今、六年生じゃないか。これだって、立派な出世だ」

「もう、ないよ」

実は、あの時、すぐお母さんに、僕の名義で銀行に貯金しておくから、  
と言って取り上げられてしまったのです。もともと、その後預金通帳を見せてもらっ  
たことがないので、本当はどうなっているのか、わかりません。



「仕方がないな。自分のを出すか」

と、お爺さんは、渋々財布を取り出ししました。

こうして、タヌキは、うちで買われることになりました。

「楽しみだな。早く、宝の山を教えてくれるといいな」

と、お爺さんはほくほくしていました。そして、

「子供が動物の世話をするのはいいことだから、たかしが、世話をするんだぞ」

と言いました。

「なんだ。僕に世話を押しつけて、自分はお宝だけもらおうというの？」

「いいじゃないか。さっき言った四年生の時上げたお金を返すのを待ってあげただろう？」

お爺さん、あきらめが悪いです。

僕は仕方なく、タヌキの世話を始めました。

タヌキは、何でも食べました。うちで飼っているゴールデンレトリバーのナウシカのドッグフードも、黒猫のポニョのキャットフードも食べます。ご飯の残りも野菜屑も喜んで食べます。こんなものを食べさせていいのかな、と思いました。スーパードッグフードも食べます。こんなものを食べさせていいのかな、と思いました。スーパードッグフードも食べます。こんなものを食べさせていいのかな、と思いました。スーパードッグフードも食べます。こんなものを食べさせていいのかな、と思いました。



タヌキには、「おたから」という名前が付きましました。ナウシカやポニヨに比べると、あんまりな名前だ、という気もしますが、お爺さんがタヌキの檻の前をうろうろしては、

「おたから、おたから」

と呟くので、それを自分の名前だと思ったのか、「おたから」と言う声がすると、振り向くようになったのです。

僕が、

「おたから、ご飯だよ」

と餌を持っていくと、檻の奥で寝ていても、嬉しそうに寄ってくるのです。

僕は、タヌキは、運動しなくてもいいのかな、と心配になりました。

ナウシカは、毎日、家族の誰かが散歩に連れて行きますし、ポニヨは庭や家の中を自由に歩き回っています。

物置の中を探すと、ナウシカが子犬の頃使っていたリードが出てきました。それを、おたからの首に付けてみると、ぴったりの大きさでした。

「よし、散歩に行こう」

と、引つ張つてみましたが、おたからは、べたつと地面にお腹をつけたまま居眠りをしていただけで、動こうともしませんでした。

そういうえば、夜行性の動物という、夜にならないと目を覚まさない動物がいると聞いたことがあります。もしかすると、タヌキもそうなのかもしれません。夜に散歩に連れて行かなきゃならないのは少し厄介だな、と思いました。

お爺さんは、暇さえあると、おたからの檻の前に来て、

「おたから、おたから、早くお宝を持ってきておくれ」と言っています。

考えてみると、タヌキがどうやって、お宝を人間のところへ持ってくるのだからわかりません。もしかすると、人間をお宝のあるところに案内してくれるのかもしれない。

だとすると、檻の中に入れておいても、仕方がないはずなのですが、お爺さんはそういうことは気にならない質らしくて、

「お宝を、早く持つてきておくれよ。早くだよ。頼んだよ」と言い続けています。

なんとなく、勉強が出来なくなった僕やあゆ子の二の舞になるのではないか、と心

配にならないでもありません。

ある日、夕方になって、おたからが檻の中で、ばたばた暴れていました。外へ出たがっているようです。檻を開けてやると、飛び出てきました。

僕は慌てて、おたからを押さえると、ナウシカのお古のリードをつけました。その間も、おたからは、隙さえあれば走り出しそうにしています。

僕は自転車に跨って、おたからのリースを掴み、

「よし、じゃあ、初の散歩にお出かけだ」

言うやいなや、おたからは走り出しました。

おたからの急ぎ方といったら、すごいものでした。車道も歩道もお構いなしに突っ切っていきます。おかげで、自動車に二回轢かれそうになり、お婆さんと女子高生とお相撲さんを轢きそうになりました。

そして、団地のはずれの電柱の下まで来ると、ぴたりと止まりました。

「どうしたんだ、おたから」



そう呼びかけても、知らぬ顔をしています。何かあったのか、  
と思つて、おたからを抱き上げてみると、おたからの座つていた  
ところで、何か光るものがありました。五円玉でした。

僕が五円玉を持つて帰ると、お爺さんは飛び上がつて喜びました。すぐに魚に走つて、おたからのために鯛のお刺身を買つてきました。

それから、ウサギの形をした貯金箱を買つてきました。そして、それを置く台の下に半紙に墨汁で「目標一億円！」と書いたのをぶら下げました。

「拾つたお金つて、交番に届けなくてもいいのかな」

「なにをいうか、こんな細かい金は持つていっても迷惑がられるばかりじゃ」

「五円玉つて、何回拾つてくると一億円になるの？」

僕は、さつき車に轆かれそうになつたり人を轆きそうになつたりしたので、ちよつとうんざりしていたのです。

「千里の道も一歩から。ちりも積もれば山となる。この言葉を覚えておきなさい。今は、こんな小さなウサギの貯金箱に五円だけだが、これがやがて、入り切らなくなつて、犬の貯金箱になる。それも、いっぱいになつたら、猪の貯金箱だ。さらに、オオカミになり、虎になりライオンになりカバになり象になる、そうなれば、一億円達成

じゃ」

僕は、お爺さんの瞳の中に、金星や土星や天の川が光り輝いているのを確かに見ました。

それにしても、象の大きさの貯金箱って、どこに売っているのだろう。どうやって家に運んでくるんだろう、と不思議に思いました。

それから、おたからは、たびたび僕を引きずって行っては、お金を拾ってききました。

夏休みまでの一ヶ月くらいのあいだに、貯金箱の中味は八十七円になりました。

「なんだ、たったの八十六円か。これじゃ、一億円どころか、元手の三万円にだっていつになることやら。こんなことだったら、タヌキ汁にして食ってしまうぞ」

と、お爺さんは言いました。僕は、世話をしているうちに、だんだん、おたからが可愛くなっていたので、

「でも、おたからが、お金を拾ってくる能力があることはわかったじゃない」

と、おたからを守ろうとして言いました。

「しかし、小銭ばかりじゃないか。たまには、一千万円くらいどーんと拾ってこないかろう」

この間は、千里の道も一歩から、ちりも積もれば山となる、と言っていたのに、同じ人の言葉とはとても思えません。

「でも、おじいちゃん、小銭でも、少しずつ、たくさん拾ってくるようになったよ」と、僕は、ノートを広げて見せました。このノートは、ウサギの貯金箱を載せてある台の引き出しに入れてあって、おたからがお金を拾ってくるたびに、記録するように、と言いつけられたのでした。

六月十六日	五円
六月二十二日	三円
六月三十日	十一円
七月九日	十三円
七月十二日	三十円
七月十五日	二十五円



「見て。七月十二日なんて、三十円だよ、三十円。ついに、大台に乗せたんだよ」

「三十円なんて、ひと月毎日拾って九百円。一億円になるまでに、わしは、とっくに死んでいるよ」

とはいうものの、このお爺さんは、絶対長生きするに違いない、と思いました。

目を覚ますと、庭の方から、うちの亀吉爺さんと鶴太郎爺さんが怒鳴り合っているのが聞こえました。

「なんじやい、あのタヌキ、三万円も取りやがって、小銭しか拾って来ないじゃないか」  
「まあまあ、千里の道も一歩から、塵も積もれば山となる、と言うじゃないか。あわてなさんな」

「それは、わしが孫に言った言葉じやい。あれは、本当に宝の山を知っているタヌキなんだろうな」

「そりゃあ、正真正銘の宝の山を知っているタヌキだ。わしが嘘を言ったことがあるか」

「滅多に本当なんて言わないじゃないか。何処か、その辺の山の中で捕まえたやつを高値で売りつけたんじゃないやな」

「わしが嘘付きじやと言うのか。あんたのところ、ろくな餌をやっていないせいじゃないのか」

「うるさい、詐欺師」

「何を言うか、どケチじじい」

「ペテン師」

「守銭奴」

「大ボラ吹き」

「金の亡者」

僕が、おたからの世話をしに下りていくと、お爺さんは檻の前にしゃがんで、一万円札を見せて、

「ほら、おたから。こういうのじゃ。こういうのを拾ってきなさい。できれば、これがまとまって、紙で封をしてある奴だと、いつそいいな。それから、これが財布とこういうものじゃ。こういうのが落ちているかもしれない。財布を拾ったら、まず中のお金だけ取り出して、財布の方は捨ててしまふのじゃぞ」

「おじいさん、おたからに何を言っているの」

「お前がペットのしつけをちゃんとしなから、わしがやっているんじゃ」

動物に一万円札を見せる躰なんて聞いたことがあります。

こんな風に僕の小学生最後の夏休みが始まりました。

僕の通信簿の中味は聞かないでください。お爺さんが、僕にはお小遣いを上げない、と言う決心をますます固くしたようです。



ついでというと、あゆ子の通信簿も、「これは、芸能界かエリートへの嫁狙いで行くべきじゃない」とお爺さんに言わせる内容だったみたいです。

僕が、休み前に先生に提出した「夏休みの予定表」によれば、僕は午前中の涼しい時間に夏休みの宿題とその他の勉強をやって、午後は昼寝をした後、運動やピアノの練習やほかのお稽古ごとをやることになっていましたが、もちろん、そんな日は一日だってありませんでした。だいたい、うちにはピアノなんてないし、習ったことさえもないのに、どうやって練習しようと言うんでしょう。

僕は去年の夏休みもおとしの夏休みも、先生に「夏休みの予定表」を出しましたが、ついに一回も守らないまま、小学校を卒業することになりそうです。

毎日、午前中から、友達が遊びに来て、だらだらごろごろとゲームをしたりテレビを見て過ごしました。

けれど、夕方からの、おたからの散歩だけは、雨が降っていない限り、欠かさずやりました。雨の日は、散歩に行けなくて詰まらないな、と思ったぐらいです。

おたからの方も、散歩に出掛けたがるのです。それも、毎日お金を拾いに行くというのではなく、僕と散歩をするのが楽しみになったんじゃないか、と思います。

「いやいや、そんな無駄な散歩をしちゃいかん。お金を拾わないのなら、家にいて体

力を温存していざというときに備えるのじゃ」

とお爺さんは言います。

「散歩の場所も考えなければいかん。効率的にやらなきゃ駄目だ」

効率的な散歩って、なんだろうと考えていると、一枚の紙を僕に渡して、

「お爺さんが、地図を作ってたぞ。これを参考にしなさい」

見てみると、町内の地図のところどころに赤ペンで印が付いています。銀行、スーパー、コンビニ、ショッピングモールなどです。

「人々が金を持っていくところ、出したり受け取ったりするところ、そういうところを重点的に散歩するんじゃ。そうそう、自動販売機の下とかお釣りの出口なんかは、かならず散歩し忘れちゃ行かんぞ」

お爺さん、散歩という言葉の使い方が間違っている、と思いました。一千万、どーんと、とか言っていた割には、小銭を拾うことに囚われているらしいのも気になります。でも、



一番いやなのは、タヌキを連れて自動販売機の下を探っている小学生、という自分の姿を思い浮かべた時でした。

それでも、すこしずつお金は貯まっていきましたが、まだまだウサギの貯金箱を犬のに変えるほどにはなりませんでした。何日かに一回は、お爺さんと鶴太郎爺さんが「詐欺師！」「金の亡者！」と怒鳴り合っているのが聞こえました。

そして、我が和泉谷家の夏の最大のイベント、二泊三日の温泉旅行が近づいてきました。お父さんの車で行って、ロープウェイに乗ったり、湖でボートで遊んだり、カバ園を見学したり、美味しいものを食べたり、温泉につかったりしてくるのです。

犬のナウシカや猫のポニョは、近所の動物好きのおばさんのうちで預かってもらうことにしています。

おたからも、そうすることになっていましたが、ある晩ご飯の時、突然、お爺さんが、

「旅行には、おたからも連れて行く。あいつは、少々、夏バテ気味じゃ。少し、田舎の空気を吸わせる必要があるな」

「お父さん、大丈夫なんですか」

と、お母さんが呆れたように言いましたが、

「大丈夫。わしとたかしが、きちんと面倒を見るから」

いつの間にか、僕も一味に加えられていました。

次の日の夕食になると、さらに、

「旅行の二日めじゃが、わしとたかしは、みんなと別行動を取る」

と言い始めました。ビールを飲んでいたお父さんが、

「父さん、さすがに、それは、ちよつと心配だな」

と、言いました。

「わしとたかしは、サイクリングに行く。このあたりは、あちこちにレンタサイクルがあるみたいじゃないか」

「それはそうだけど、二日目は、あちこち遊んで回る予定だったじゃないか」

「それは、お前たちで行けばいい。わしとたかしと、おたからは、別行動を取る」

「お爺さん、僕、カバ園、見たいよ」

と、僕が言うと、

「カバが何だ。カバを見て何になるというんだ。一文の得にもならんじゃないか。カバなんか、都会の動物園でも見られる。わざわざ、遠くまで行ってみるものじゃない」  
そういうお爺さんを見て、お父さんが、

「と、父さん……父さんの目が輝いてる。何故だかわからんが、強欲の光りに輝い

ている・・・こうなると、父さんに何を言っても駄目だ・・・」

と、恐ろしそうに言いました。

お爺さんはこうなると人の言葉など聞かないことを知っているので、お母さんもお父さんも、それ以上はなんにも言いませんでした。僕は、もうちよっと両親に抵抗してもらいたかった気がします。

ご飯の後、案の定、僕はお爺さんに呼ばれました。

お爺さんは、ガイドブックを開いて、

「たかし、見てごらん。これは、今度行く温泉のガイドブックだが、こんな記事を見つけたんだ」

お爺さんが指さすコラムには、赤ペンで星印がつけられています。  
した。

くだりざかおちめのかみ

「このあたりには、戦国時代、下坂落目守という武将が館を作つて支配していたんだ。この武将は領民から年貢を絞り上げて、金を貯めていた。そして、いざという時の軍資金として、館の近くの山の中に隠しておいたんだ」

僕は、なんとなく、その武将、お爺さんに似ていると思いました。が、黙っていました。



「ある時、武田信玄の大軍が攻めてきた。今こそ、あの軍資金を使って、兵を集め武器を整えて、一戦交えるべき時だ。そう思ったものの、あまり嚴重に隠したものだから、どこにあるのかわからなくなって、結局見つからないまま、武田の軍に降伏してしまった」

ああ、ますます、お爺さんそっくりだと思いましたが、今度も黙っていました。

「さて、その軍資金なんだが、誰かが見つけたとか、持ち出して使ったとか言う歴史的な資料がないのだそうだ。ということは、今でも、何処かに埋まっているのではないかと噂が、一分の歴史ファンのあいだでささやかれているそうだ」

ああ、お爺さんに似た人って、世間にいくらでもいるんだな、と思いましたが、今度も黙っていました。

「ダウジングという木の枝を使って資源を探す方法や、色んな方法で探している人がいるらしいが、まだ、見つかっていない。そこで、おたからの出番だよ。なんせ、宝の山を知っているタヌキだ。考えてみれば、今まで、おたからが小銭しか拾ってこなかったのは、町中でやっていたからだ。タヌキは元々、野山にいる動物だろう。言ってみれば、都会はアウェーだ。そこへ行くと、山の中はホームグラウンドみたいなもんだ。どうだ、今度こそ、おたからの実力を十二分に発揮してもらおうじゃないか」

「下坂落目守なんて、いかにも落ち目みたいな武将が本当に宝なんて持っていたのか

な」

「何を言うか。人をその名前だけで判断してはいけない」

「本当は宝なんてないのに、部下や領民に背かれないように、いかにもあるように言いふらしていただけ、つてことはないのかな」

「やってみなきゃ、わからんじゃないか。いいか、たかし。男はロマンだ。ロマンに賭けないようでは、男じゃない」

僕は、お爺さんの口から「ロマン」なんて言葉が出たのは初めてだと思って、目をぱちくりさせました。

結局のところ、僕はお爺さんと一緒に下坂落目守の宝を探しに行くことになりました。お爺さんは喜んで、

「はーやーく、来い来い、温泉旅行ー」

と歌っていました。

「じゃあ、気をつけてね。時間までにはちゃんと帰ってきてね」

「たかし、お爺さんが欲に駆られて危ないことをしそうになったら止めてくれよ」

「たとえば、お爺さんに何があっても、たかしだけは、ちゃんと帰ってきてね」

レンタサイクルのところまで送ってくれた、お父さんとお母さんは、僕に色々と言い聞かせました。

おたからに、リードをつけて走り始めると、やはり都会よりも気持ちがいいのか、なんだか嬉しそうに見えます。

お爺さんは、つんのめるように自転車に乗って目を剥いて犬のように舌を出して、時々、

「おたから、おたから」

と呟いていました。僕は、お爺さん用のリードも用意してくるんだったと思いましたが。

途中から、おたからは車道を離れて、山の方へ行く小道を歩き出しました。

「おお！」

と、お爺さんが嬉しげな声を上げました。

「こっちは、正に下坂落目守が宝を隠していたとされる山の方だ。いよいよ、宝の山を知っているタヌキの本領発揮じゃな」

「でも、色んな人が、さんざん探したのに出てこなかったんでしょ？」

「たかし、我々は、今、歴史上かつてない最強のタヌキを味方につけていると言うことを忘れるな。ロマンだ。男はロマンだ」

一度は、タヌキ汁にして食ってしまう、とか言っていたのに、どうしてこうも言うことがころころ変わるのか、そっちの方が謎だったりロマンだったりするような気も



します。

上り坂が続きます。いくら欲に駆られているからと言って、お爺さんだってもう、七十を過ぎています。もう、自転車から降りて、押しているのですが、その押している足が動かなくなってきました。

「くそう、宝の山に入っているというのに・・・」

「お爺さん、無理しない方がいいよ。普段、全然、運動なんかしていないじゃない。散歩やジョギングをするお年寄りを見ては、『あんな、無駄なことをする奴らの気が知れない』と言って、せせら笑っていたのはお爺さんじゃないか」

「ああ、こんな事なら、運動しておくんだった。プールに通う年寄りを見て、『へへへ、毎日土左衛門の練習かい、ご苦労なこった』とか、言うんじゃないか」

「お爺さん、ここで休んで待っていてよ。僕、もう少し、おたからの後をついて行ってみるよ」

僕は、おたからと僕の昼ご飯を持つと、お爺さんを残して、また登り始めました。じぎに、自転車で行くのは無理になったので、そこに置いて歩き始めました。

だんだん、山も緑も深く、濃くなっていくような気がします。人の声なんて、まるで聞こえません。一人で、こんな所に来たのは初めてです。

「おたから、大丈夫だろうか」

おたからは、こつちを振り返ると、いやに自信ありげに頷きました。

だんだん、岩を上ったり、藪を漕いだり、小さな滝を渡ったり、道とは思えないような道に入っていきます。

ふと見ると、岩の陰に小さな祠があつて、中を覗くと、恐ろしげな顔をした仏像が祀られていました。

「こういうものがあると言うことは、ここまで人が来たことがあるということだよな」  
そういえば、お爺さんが図書館から借りてきた、このあたりの歴史のことを書いた本の中に、下坂落目守は、修験者を使って山に呪いを掛け、宝物が見つからないようにしたという伝説があると書いてあったのを思い出しました。

その呪いとこの仏像と関係があるのかどうか、わかりません。でも、なんだか気味が悪いような気がします。もともと、お爺さんは、その文章を読んで、

「ということは、ますますお宝が手つかずで残っているという証拠じゃ。山が、わしらを呼んでいるぞ」

と、飽くまで前向きに楽天的に捉えていました。そういえば、僕の周りで、欲に駆られたお爺さんぐらい前向きな人はいないような気がします。

それから、どれくらい上ったでしょうか。そろそろ、昼ご飯にしようか、もう引き替えした方がいいんじゃないか、とか、考え始めた頃です。

不意に、僕たちの前に洞窟が現れたのです。入り口は、僕の背丈の倍ほどもありそう  
な、大きな穴です。

中は真つ暗です。僕は、自分でもわからないのですが、なぜか、  
「誰かいますか」

と、暗闇に向かって声を掛けました。僕の声がわんわん響くだけです。その自分の  
声が響くのを聞いて、背中がぞつととしてしまいました。

続いて、小石を拾って、中へ投げてみました・・・。

「いてっ」

・・・と言う声でもするかと思いましたが、何も聞こえません。

おたからが、ひよこひよここと大きな尻尾を揺さぶりながら、中へ入っていきました。

「おい、おたから、先に行くなよ」

僕は、ザツクの中から懐中電灯を取り出しました。そして、おたからの後を、中へ  
入ってみて、懐中電灯であたりを照らしてみました。

「ばさばさっ」

と、蝙蝠の群れが飛び立つ・・・かと思いましたが、なにも起こりません。あちこ  
ちに光りの輪を投げかけているうちに、地面の上に、おたからが座っているのがやっ  
と見つけられました。



「おたから、あまり勝手に歩き回るなよ」

おたからが、僕の声に振り向くと、その目が

「ぴかっ」

と、赤く光りました。

「わあっ」

と、僕は叫び声を上げました。僕の叫びが洞窟の中に、わんわん反響しています。

「あれ、おたから、何か言った」

どうも、人の声が聞こえるような気がします。でも、じっと黙っていると、やはりひっそりしています。僕の声の反響を、他人の声と想像ただけかもしれない。

「あ、おたから、どこへ行くの」

おたからが、懐中電灯の光りの若の外へ姿を消したのです。おたからが行ったらしい方向へ懐中電灯を向けてみると、僕の背丈くらいと思われる洞窟がさらに奥へ続いていくようです。

「おたから、中へ入ったの」

また、僕の声が反響します。そして、それが止むとしんとしてしまいます。

僕は、闇の中に入ったまま、その穴蔵の中へ入っていかうかどうしようか、迷っていました。だんだん、心臓の音が高くなってきます。わけもなく、左手のげんこつ

を握りしめました。心臓の音は、洞窟の中で反響しそうなくらい高くなったと思うのですが、もちろん、それは錯覚です。

よし、はいつてみよう、と僕が決心した途端、

「きいーっ」

という鋭い声が聞こえました。まるで、洞窟全体が叫び声を上げているようでした。

「おたから、大丈夫かい、おたから」

僕は、考える暇もなく、洞窟の中に入っていきました。

引き続き、きつ、きつ、きつという短い叫び声が聞こえています。どうも、それが、おたからの声のような気がしてきました。

その声を頼りに懐中電灯を照らしてみると、地面におたからが座っているのが見え  
ました。

「おたから、どうしたの」

おたからは、僕が入って来たのを認めると、立ち上がって、二、三度、その辺をく  
るくると歩き回って、また座りました。

「あ」

おたからがさつき座っていたあたりの地面に、きらりと光るものが見えました。

「やっぱり、下坂落目守の宝の話は本当だったんだ」

僕は、駆け寄ってしゃがみました。そして、きらきら光る、その他からものをつまみ上げました。

五円玉でした。

元のところへ戻ってきました。おじいさんは、僕が下りてくるのを見ると、

「お、おう。たかし、無事じゃったか。心配したぞ」

と、力無く言いました。

「僕は大丈夫だよ。お爺さんは？」

「わ、わしはもう駄目じゃ。ここで、このまま死ぬかもしれん」

「どうしたの。どこか痛いの？ 昼ご飯は食べた？」

お爺さんは、目をつぶって首を横に振りました。僕は、念のためにお爺さんのザックを調べてみると、ご飯は綺麗になくなっていましたし、おやつに食べようと盛ってきたお菓子も全部なくなっていました。

「食欲はあるようだね」

と、僕は言いました。

「わしは、もう駄目だ。たかし、悪いが、わしを担いで、お父さん達との待ち合わせ場所まで連れて行ってくれ」

どうやら、歩いたり自転車を漕いだりするのが、面倒になっただけのようです。そういうえば、顔色なんか、さつきに比べるとつやつやしているようです。

「お爺さん、宝の隠し場所は見つかったよ」

そういつてみると、

「なに！」

たちまち、お爺さんは立ち上がりました。

「おたからが見つけたんだ。すごい山奥の洞窟の中なんだ。あれなら、他の人じゃ見つからない。どうも、修験者の呪いも本当みたいだね」

「ほ、本当か。よし、今からそこへ行こう」

「駄目だよ。これからじゃ、帰りが遅くなるよ。それに、こんな装備じゃ宝物を持って帰るのも無理だし。場所はわかっていいるのだから、来年でもまた来ればいいよ」

「しかし、それまでにほかの奴に見つけられたら」

「大丈夫だって。おたからも、そう言っているよ」

「なに？おたからが、言葉を喋ったのか」

「そうだよ。その不思議な洞窟の中では、おたからは喋ることが出来るんだ」

僕は、自分でも、よくすらすらとこんな嘘が出て来るな、と思いました。

「そ、そうなのか」



「うん。そして、これから秋になると、洞窟は落ち葉で埋まってしまおうし、冬になると雪で埋まってしまおうし、だから、来年を待った方がいい、って、おたからが言っていた」

「場所だけでも、確認しておきたいがな」

「駄目だよ、お爺ちゃん、運動不足だって事忘れたの、と、おたからも言っていたよ」「洞窟の中でか？」

「う、うん」

こうして、小学生最後の家族旅行が終わりました。旅行から帰った後も、おたからは小銭を拾い続けています。時々、外国のコインを拾うこともあります。

お爺さんは、それを見て、相変わらずぶつぶつ言っていました。僕が、

「お爺さん、おたからが拾ってきた小銭を貯めて、来年、あの洞窟へ行く時の電車賃にすればいいんじゃないかな」

というと、

「そ、その手があったか」

とお爺さんは叫んで、目がうるうるして輝いて、あやうく天から光が差し、天使が舞い降りてきそうな勢いで感動していました。

鶴太郎爺さんには、

「ふふふ、あんた、いいタヌキを譲ってくれたもんだのう。いや、ありがとう、ありがとう」

と、言っています。鶴太郎爺さんは、始め気味悪がっていましたが、この頃では、わけはわからないものの、

「なあ、あのタヌキ、三万五千円で買い戻そうじゃないか。いや、四万円でもいい」と、言い始めているみたいです。

あの洞窟の五円玉が、なぜあんなどころにあったのか、わかりません。

でも、あの五円玉のことは、お爺さんには言わないで、僕とおたからの思い出に取っておこうと思っています。



たぬきのおたから

<http://p.booklog.jp/book/58149>

文豪堂書店

著者：中川善史

絵：かないてつお

[文豪堂書店ブログ](#)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58149>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58149>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ